

藤子・F・不二雄における〈もう一人の自分〉

大場 厚 志

藤子・F・不二雄の作品には、〈もう一人の自分〉が登場するものが少なくない。〈もう一人の自分〉あるいは分身のテーマは、文学においては繰り返し扱われてきたものである。藤子・F・不二雄の作品に登場する分身において特徴的なことの一つは、パラレルワールドに登場する〈もう一人の自分〉、すなわち比喩的な意味ではなく、まったく同じ姿の自分、遺伝子レベルにおいてもまったく同一の人物、文字通りの意味における分身が登場することである。もう一つの特徴は、年齢の異なる自分同士が、時間を超越して出会うことである。これはパラレルワールドの分身とはかなり異なった形ではあるが、年齢が異なるとはいえ自分同士であるには違いない。また、分身ものの変型と言える作品もある。この小論では、藤子・F・不二雄の作品における〈もう一人の自分〉が、どのように描かれ、どのような意味を持つか、深層心理学や欧米の文学作品等も援用しつつ考えてみたい。

一 パラレルワールドの〈もう一人の自分〉①

——「ふたりぼっち」と「パラレル同窓会」

まず、パラレルワールドに登場する〈もう一人の自分〉について考えてみよう。パラレルワールドとは、「観察者がいる世界から、過去のある時点で分岐して併存するとされる世界。並行世界。並行宇宙」

藤子・F・不二雄における〈もう一人の自分〉

(デジタル大辞泉)であり、複数の世界が同時に存在するという考えに由来するものである。併存して存在する複数の世界には、それぞれ自分が存在する。世界の数と自分の数は等しい。パラレルワールドが登場する作品には、「ふたりぼっち」(一九七九)、「パラレル同窓会」(一九七九)、「ぼくの悪行」(一九七八)がある。

「ふたりぼっち」では、主人公の少年がパラレルワールドの〈もう一人の自分〉と出会い、学校や不良に対する嫌悪感、高嶺花子というクラスメイトに対する恋心などを共有し、宿題を協力して片付けたり、SFマンガを合作したりして連帯感を感じ、深い共感を抱くようになっていく。自分同士ゆえに「心の奥底まで打ちあけられる」(『少年SF1』一九七)ので、二人の間に秘密は介在せず、他者に対して二人だけの秘密が共有される。この秘密の共有という状態が、二人の親密さを融合の関係にまで深めていく。二人は毎日のように行き来し、いわば自分同士の蜜月とも言えるべき関係を享受するのである(図1)。しかし、ゲームをしても、とっくみあいをして、まったく互角であることがきっかけで、二人の間にライバル意識が生じる。主人公は相手に勝ちたいと思うようになり、内緒でジョギングを始めて足腰を鍛えようとする。「あいつをぶん投げてみたかったんだ」(『少年SF1』二〇四)と彼は言うが、「あいつ」という言葉は、〈もう一人の自分〉を疎外された自己として捉え始めたことを示している。相手の側も高



図1 「ふたりぼっち」『藤子・F・不二雄大全集 少年SF短編1』小学館、2010、p.196

あり、二人が激励しあい、二人とも「ひとりぼっち」に戻って物語は終わるのであるが、彼らが互いに感じた他者性は、「パラレル同窓会」と「ぼくの悪行」において、それぞれ興味深い展開を見せることになる。

また、この作品は自分に対する認識の問題も提起する。外側からの視線の獲得によって、主人公たちは他者の他者としての自分を見ることができる。それは自分の知らない自分を知ることであり、自分が自分を知らないことを知ることでもある。「ふたりぼっち」においては、睡眠中の歯ぎしりの発見という形でしかそのことが表されていないが、彼らはそのような自分に対する客観的な眼差しを持つという状況にいるのである。「自分の姿を外から見ると、ときどきつらくなるんだよ」(『少年SF1』二二七)という、二人が永遠に別れる直前の言葉は、人は自分を客観的な視点から認識することを嫌うものなのではないかと思わせ、興味深い。

「ふたりぼっち」においては、自分同士のライバル意識が他者性を表していたが、これは「自分」という存在のありようが唯一の必然ではないことを示唆している。哲学者の永井均は「藤子・F・不二雄は、現実をつねにありえたかもしれない他の可能性との対比の中で見てい

る。われわれが信じて疑わないこの現実が、彼の目には、そうでもなかったひとつの偶然的なあり方のように見えているのである」と述べている(永井二二)。永井均は「気楽に殺ろうよ」(一九七二)と「流血鬼」(一九七八)に関してこのように述べているのであるが、この言葉は藤子・F・不二雄の扱う「自分」についても当てはまる。つまり、現在の自分のありようは、多くの可能性の中の一つにすぎないということである。そのようなことは「分岐点」(一九七五)でも描かれている。「分岐点」においては、人生の分岐点で選択しなかった人生が具現化される。この分岐点とは女性の選択に関わるものであるが、どちらの女性と結ばれた場合も主人公は満たされた人生を送っていない。最終コマで、彼が幼い娘に対して「おまえもやがて人生の岐路に迷う日がくるだろう。判断をあやまることのないようパパは祈るよ」(『SF異色2』八五)と、心の中で語りかけるのが皮肉である。どのような選択をしても人生は満たされるものではないという、おそらく藤子・F・不二雄のものであろうこの人生観は、「パラレル同窓会」にも反映している。

「パラレル同窓会」においては、人生の選択・決断のたびに分裂・増殖したパラレルワールドに住む、「枝分かれしたすべての自分が一堂に会する：パラレル同窓会」(『SF異色2』二二九)が開催される。パラレル同窓会に集まったすべての自分たちは、人生の転機に異なる選択をした自分たち、そうやっていたかもしれない自分たち、すなわち多様な可能態としての自分たちである(図2)。哲学者の鷲田清一はR・D・レインの対人関係論である「自己と他者」(第三章「見せかけと逃避」)を援用して次のように述べている。

そうありえたかもしれないじぶんをつぎつぎと棄てていくことで、はじめて「じぶん」になるということ、それを精神科医のロナルド・D・レインは「エクスタシーの放棄」と呼んだ。つまり、わたしは

ちがつねに一定の「だれか」であるのは、別のものになる＝自分でなくなる（つまりエクスタシー）さまざまの可能性を縮減して、社会のなかでイメージとして公認されているある人格のタイプに自分を合わせることによってだ、というのである。（鷲田 二九）

藤子・F・不二雄は「パラレル同窓会」において、〈自分〉という「だれか」になるために捨てられた無数の自分たちを集合させてみせたのであり、それによって〈自分〉という

ものの固有性を否定し、その不確定性を示したと言える。本来は内的な現象であることを外的な現象として、すなわち一人の人間の内部の分裂を、多重人格（解離性同一性障害）としてではなく同窓会に集まる無数の自分たちとして、平然と描いてみせたこのマンガ家の発想は評価に値する。主人公は同窓会の様子を見て、「たがいが妙によそよそしい。自分は他人の始まりか」（『SF異色2』一三三、傍点筆者）と思う。まったく同じ遺伝子を持つ自分同士とはいえ、彼らは互いに他者と同じなのである。枝分かれした時期が早いほど他者性は強くなる。この同窓会には、「ふたりぼっち」の前半に見られたような、互いの理解と共感を伴う自分同士の蜜月は存在しない。

主人公は極東物産という大会社の社長であり、自らを「人生ゲーム

藤子・F・不二雄における（もう一人の自分）



図2「パラレル同窓会」『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編2』小学館、2011、p.137

の勝利者」（『SF異色2』一一六）であると豪語するように、すべての自分の中でもっとも成功した一人である。「わたしの今日は何度か訪れた人生の転機にあやまたず正しい決断をもって進んだことによるものだ。勝者は勝つべくして勝ち、敗者もまたしかり！」（『SF異色2』一一六）と彼は人生を誇る。人生の選択・決断のたびに世界が枝分かれしたのであれば、迷いながらも切り捨てた本音の選択などに関して、自分たち同士が羨望することにもなりうる。成功者である主人公が他の自分たちから羨まれるのは当然としても、落ちぶれた自分が、若いころに森山咲子という女性を強引に奪ったことに対して、主人公を含めて咲子に振られた自分たちから羨まれるという皮肉な事態も起こる。彼らの羨望は、人間の執着・未練の強さ、業の深さ、欲望の果てしなさをよく表している。

社長になった自分同士でも差が現れる。パラレル同窓会のほぼ直前に咲子が主人公の助けを請いに来たとき、主人公は「空想の中でわたしは咲子を思うままにいたぶって楽しんでやった」（『SF異色2』一九）。彼のサディズムは空想に留まっているが、最も近いパラレルワールドの自分は、彼と同じ地位に就いているものの、咲子に対するサディスティックな空想を実行に移したらしい。SMショーが売り物のクラブに関しても、「自分を律することに、誇りをもって生きてきた」（『SF異色2』一二三）と自制する主人公とは異なり、最も近い自分を出かけていき、主人公の充足できない願望を充足しているのがある。サディズムの誘惑に抗うか否かが、換言すれば自制するか願望を充足するかが、世界の枝分かれの原因となったようである。変節はいつでも起こりうるということだろう。

もっと若いころに枝分かれした世界の自分たちには、テロリスト、殺人鬼、作家などがいる。テロリストは青年期の「理想と情熱を、そのまま現在まで燃やしつつづけている」（『SF異色2』一三五）のであり、理想や情熱がいかに危ういものとなりうるかを示唆している。サ

藤子・F・不二雄における「もう一人の自分」

ド趣味が高じた結果としての殺人鬼は、「自分を律すること」をせず、欲望や本能に身を委ねることの危険性を例証している。

ただ、作家となった自分に対しては、彼がまったく売れない無頼派で、肉体労働で生計を立てざるをえないにもかかわらず、主人公は羨望する。「人生ゲームの勝利者」と自負する主人公ではあるが、「フツとなにか…… 満たされぬ思いが…… もったなくなが…… わたしにはもっと多くのなにかが……」(『SF異色2』一一七)と、ふだんから現状にどこか物足りなさを感じている。この物足りなさは、選択という行為に必然的に伴うものであろう。何かを選択することは、何かを切り捨てることでもあるからだ。「満たされぬ思い」とは、切り捨てたものへの未練・執着ゆえであり、人間の欲望の限界のなさゆえでもある。主人公が作家と世界を交換して入れ替わった最後のコマで、「なにか満たされぬものが…… そうだ、満たされていないのは胃袋だ」(『SF異色2』一二九)と思う場面は、人生における重大な選択・決断が、滑稽にも精神の充足か胃袋の充足か、という二者択一に収斂しており、この単純化がきわめて皮肉な印象を残す。

二 パラレルワールドの「もう一人の自分」②

——「ぼくの悪行」と人格の中の対立

「ぼくの悪行」においては、自分同士の関係がより対立的にかつユーモラスに描かれている。「ぼくの悪行」の主人公は、職業、団地、会社などがすべて「ありふれた」という形容詞で修飾される三一歳のサラリーマンである。彼は、部下に陰湿ないじめを繰り返す課長に対する強い反感も、好意を抱く喫茶店の若いウェイトレスをくどきたい気持ちも、ひたすら隠して表に出さない「いたって常識的な人間」(『SF異色3』一〇)である。彼は何ら目立つところのないごく平凡な人物と言っている。そのような主人公と、パラレルワールドの「もう一

人の自分」とが、それぞれの世界を往来し、互いの世界で、平凡で常識的な人物が日常的に抑圧していることを、勝手気儘に実行に移そうとするのである。

給与の前借りをされた主人公の、相手に対する「あのやろお」(『SF異色3』二一)という言葉は、「もう一人の自分」を他者化していることを示している。「はつきりと悪意をむき出しにして反撃にでたんだ!!」(『SF異色3』二四)、「ぼくがやりたくてもやれなかったことをどんどん実行しやがって!! おーし負けんぞ!!」(『SF異色3』二五)と、この自分同士は互いに他者であると認識するのみならず、互いに悪意を抱き、完全に敵対関係になる。「もう一人の自分」は、主人公の世界で課長に暴力を振るったり、ウェイトレスの女の子と性的な行為に及んだりする。主人公もまた同じように、相手の世界で課長に暴力を振るおうとするが、偶然が手伝って未遂に終わる。女の子をデートに誘いはするが、気弱さのせいもあり性的な行為まで及ぶに至らない。すなわち、主人公の側は欲望が抑圧された状態に留まるが、敵対する側は欲望を実行に移しているのである。ここまでくると、これら二人の自分の関係を、ユング心理学における自我(ego)と影(shadow)の関係に重ねて考えることができる。この作品の扉絵はまさに「もう一人の自分」

ぼくの悪行



図3 「ぼくの悪行」『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編3』小学館、2012、p.7

である。ユング心理学者の河合隼雄によれば、影は「生きられなかった反面」でもある。とすれば、その「生きられなかった反面」の生きている世界が、パラレルワールドという形で表現されていることになる。影は常に意識の中に侵入しようとし、自我がそれを検閲し阻む。「ぼくの悪行」における主人公とう一人の自分は、その両者の敵対性において、まさにそのような自我と影の関係とパラレルになっているのである。またこれは人格の中の対立とも言いうる。

人格の中の矛盾・対立は、文学においては分身 (double, alter ego) のテーマで繰り返し描かれてきた。ある批評家は、一九世紀の文学における分身のテーマを扱った研究書の中で、文学における分身のヴァリエーションを挙げた後、「…分身は、分裂と統合との間の緊張から生じるものであり、分裂と統合との間の緊張に形を与えるものでもある。それは統合の中の矛盾、分裂の中の統合、個人の統合を表す似姿、人格内部の分裂を表す二重性あるいは相補性を象徴している」(Hardman) と述べている。深層心理学的には、人格の中の矛盾・対立から生じる現象に、「二重人格」や「二重身」がある。前者は「同一個人に異なった二つの人格が交互に現れる現象で、両者の間に自我意識の連続のないもの」(河合三八)、「自分の心の内に存在するもう一人の自分が本来の自分と入れ替わって行動するような現象」(桑原四三)である。後者は「自分が重複存在として体験され」(河合四七)、「もう一人の自分の姿が見えたり、その存在が感じられたりする現象」であり、自己像幻視、ドッペルゲンガー、分身などとも呼ばれる(桑原四三)。文学作品としては、「二重人格」ではR・L・スティーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』(一八八六)、「二重身」ではエドガー・アラン・ポーの『ウィリアム・ウィルソン』(一八三九)が想起される。ドストエフスキの『分身』(一八四六)も、「二重人格」という邦題もあるものの、先の定義に従えば「二重身」の物語である。「ぼくの悪行」は、「二重身」の物語の中に、一人の人間の中の分裂を

表しているものであり、文学において繰り返し扱われてきた心理学的な分身のテーマを持つ作品に連なるものである。「ふたりぼっち」において、自分同士に共感し合っていた二人は互いをライバル視し、他者性を認識しあうようになっていったが、二人とも「ひとりぼっち」に戻らずにあのまま会いつづけていたとしたら、「ぼくの悪行」の場合のように、自我と影のような敵対関係になる可能性は少なくない。その意味で、「ぼくの悪行」は「ふたりぼっち」の未来形と言ってもいいだろう。

三 「ふたりぼっち」の心理学的解釈

「ふたりぼっち」も「もう一人の自分」を心理学的問題として捉える解釈が可能である。それを考えるためにはまず、この作品が日記であることに注目しなければならない。主人公の少年が日記を書く場面で始まる第一頁は、「…いまでも信じられないくらいだよ」(『少年SF』一八八)と彼が口にする四コマ目を除いて、言葉はすべて日記に書いたものである。その後の頁では、ところどころに日記の記述が鉤括弧に入れて表記される。そして最後の頁は日記の記述で終わる。日記の記述そのものではない部分は、絵と吹き出しによる通常の表現で描かれる。日記は一人称の語りである。マンガにおける一人称の語りは、小説における一人称の語りとは異なることに注意しなければならない。小説においては、一人称の語り手が語る物語は、語られることすべてが語り手の目を通して見られ、主観を通して捉えられ、言葉を通して語られる。ところがマンガにおいては、語りそのものは小説と同じく、語り手の目を通して見られ、主観を通して捉えられ、言葉を通して語られるが、絵による表現は必然的に、語り手もそれ以外の人物も同じように客体化されたものにならざるをえない¹⁾。したがって、鉤括弧に入れられていない部分も、一見したところ客観的な表現に思

われ、日記を意識させないものとなっているかもしれないが、じつは日記の記述という一人称の語りを、絵と吹き出しによって客観的視点から再現したものなのである。要するに「ふたりぼっち」全体が日記の内容なのであり、作品全体が少年の目を通して、彼の主観を通して語られているのである。

このような視点の問題のほかに重要なのは、少年が日記を書くに至った動機とその結果である。主人公の少年は友だちがおらず、人と心を通い合わせることがなかったにちがいない。同じクラスの高嶺花子には一方的に思いを寄せるだけであり、話しかけることもできずにいるし、彼女の絵を描いたことがきっかけで級友たちにいじめられるし、いじめっ子にはお金をせびられてもいる。授業に身が入らないと教師からも叱られる。学校生活においてこれは日常茶飯事なのだろう。成績はビリに近い。家庭においても、父親がわりである歳の離れた優秀な兄に叱咤される。学校はおろか家庭の中にさえ居場所はないようなものである。話の終盤に「ぼくは、ひとりぼっちにもどった！」（『少年SF1』二一七）とあるように、彼はいつも「ひとりぼっち」でいたにちがいない。その寂しさをまぎらすために、彼は日記を書くようになったのだらう。その日記の中で、自分自身に語りかける文章を書くうちに、もうひとりの自分を創造するようになった。自分に対してであれば、他者とかかわることのできない者も、心を開くことができる。「ふたりぼっち」は、他者と触れ合うことのできない孤独な少年が、孤独から逃れるために日記の中で作り上げたファンタジーという解釈も可能なのではないか。

要するにここで試みようとしているのは、たとえばエドガー・アラ・ポーの「ウィリアム・ウィルソン」やドストエフスキの『分身』などと同じように、心理学的な意味での分身ものあるいは二重身ものとして「ひとりぼっち」を解釈しようとするものである。「ウィリアム・ウィルソン」におけるもう一人のウィルソンは、実在する存在で

はなく、主人公ウィルソンの良心、あるいは彼の超自我を表す分身と捉えるのが一般的な解釈であろう。主人公ウィルソンが悪に深く染まるほど分身を呼び出してしまったのである。ドストエフスキの『分身』の場合も、うだつの上がらない小役人である主人公の強迫観念の結果として、自分のできないことを平然とやっていた分身が妄想される。「ウィリアム・ウィルソン」と『分身』の分身は主人公の嫌悪の対象であったが、言うまでもなく「ふたりぼっち」の場合はその逆である。別の例としては、これもまた登場するのは「ふたりぼっち」のものとは異なるタイプの分身ではあるが、トルーマン・カポーティの「ミリアム」（一九四五）が挙げられる。「ミリアム」においては、狭い生活領域で孤独な暮らしをする寡婦である主人公が、自分と同じファーストネームを持つミリアムという少女を妄想し、その少女が、主人公がしたくてもできないようなさまざまな行為をするのである。妄想によるファンタジーと言え、たとえばヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』（一八九八）においては、主人公であり語り手でもある女家庭教師は、性的抑圧や不安恐怖症などのために、死んだ使用人の幽霊を妄想した。この作品の主要部分は語り手の手記であり、主観的な一人称の語りという点で、日記である「ふたりぼっち」と共通している。『ねじの回転』は分身とは直接的に関係がないように見えるかもしれないが、死んだ前任者ジュスルを主人公の分身と捉えれば、作品の様相がにわかに変わってくるように思われる。

「ふたりぼっち」に登場するのは、抑圧されたものとしての「もう一人の自分」でも対照的な「もう一人の自分」でもなく、言わば癒しのためあるいは自己保存のための「もう一人の自分」であるが、分身が登場する欧米の文学作品と共通するものを持つマンガであると言えるだろう。「パラレル同窓会」、「ぼくの悪行」のようなパラレルワールドものや、この後で扱う作品のようなタイムスリップものが、藤子・F・不二雄の描いたファンタジーであるように、「ふたりぼっち」も

また藤子・F・不二雄が創造した孤独な少年が作り上げたファンタジーなのであり、きわめて心理的な物語でもありうるのである。

四 時間を超越して出会う自分同士

次は藤子・F・不二雄の作品において、自分同士が時間性を超越して出会う場合について考えてみよう。そのような状況が描かれる作品には、タイムスリップやタイムマシンによる時間移動が導入されている。

「昨日の俺は今日の敵」(一九八二)は、原稿の締切りに苦しむマンガ家を半ば自虐的かつコミカルに描いた作品である。この作品は、タイムスリップによって少し前の自分を変えることで、現在の自分の状況を改善しようとするものであり、きわめて近い自分同士が争うこととなる。作品を書かずに眠ってしまった半日前の自分に対する「昨夜のおれが憎い!! ぶんなぐってやりたい!!」(『SF異色4』三七二)という言葉が示すように、過去の自分は他者化されていく。そして、半日を隔てて会った自分同士で次の会話が交わされる。

「何とかいけそうじゃないか。みろ。やればできるんだ」

「しかし……さっきからお前のいい方きいてると……まるで他人事だよな 自分に向かって言うことじゃないよな」

「結局は他人さ。いや 離れられないだけに他人より始末が悪い。だれだって過去の自分の尻ぬぐいにウンザリしてるんだ。未来の自分に責任がもてるわけもないし」(『SF異色4』三八二)

この会話は、過去、現在、未来という時間経過の中での、自分という存在の一貫性に対して、そしてそのときどきの「現在」における自分のありようの必然性に対して、疑問を呈するものとなっている。つまり、自分という存在の形は、多くの可能性の中の一つにすぎないとい

藤子・F・不二雄における(もう一人の自分)

うことである。このことは「パラレル同窓会」における可能態としての大勢の自分という捉え方とも共通する。藤子・F・不二雄の人間観の表れであろう。

「自分会議」(一九七二)では、学生の自分が基点となり、将来の自分が過去の自分である彼に働きかけてくる。ほぼ一〇年の時を隔てた四人の自分同士が一堂に会し、相続した山林を売却するか否かについて、将来の自分たちが激論を交わす。それぞれの年代の自分がそれぞれの置かれた状況に応じた主張をする。二〇代後半の自分は生活を楽しむ権利を主張し、老境に入った自分は若い自分に「もっと未来の自分に対して責任をもて!!」(『SF異色4』六九)と迫る。激論を傍観していた学生の自分は、「自分どうしのあらそいほどみにくいものはない」(『SF異色4』五五)と言い、多数決を提案するが、多数決によっても決着はつかない。その状況に学生の自分は、「自分は他人のはじまり」(『SF異色4』七〇、傍点筆者)と思う。これまで見てきたような自分という他者がここにもよく現れている。これは現在を楽しみむか、将来のために現在の欲望を抑えて努力するか、という選択にも通じるだろう。「パラレル同窓会」で見たように、どちらを選択するかで、将来まったく異なる自分になる可能性があるということである。

結末はきわめて皮肉である。議論の決着がつかないので子どもの頃の自分と呼び出す。二〇代後半以上の自分同士が激しく言い争っているのを見て(図4)、学生の自分が「あ



図4 「自分会議」『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編4』小学館、2012、p.71

れがぼくの将来の姿かと思うと生きていくのがいやになっちゃう」『SF異色4』七二』) と思った瞬間、子どもの自分は、将来の自分たちの争いを目の当りにして失望し、窓から身を投げる。子どもの自分が死ぬことにより、その後のすべての自分が無に帰すのである。この将来の自分同士の争いとは、先に述べた自我と影の対立を始めとして、さまざまな環境や状況において生じる選択にまつわる惑いの隠喩でもあろう。この争いの醜さは、その選択が将来にいかに関わる結果をもたらすかを表すと同時に、将来の自分についてイメージすることに対するアンチテーゼになっているのではないか。将来の自分にはさまざまな可能性があるにしても、現在の自分を精一杯生きるほかないのである。子どもの自分が死を選ぶのは、自己の中の他者が耐えられぬほど醜悪で恐ろしいものと認識されたことを示している。

過去の自分を変えることによって現在の自分を変えようとするのは、「あのバカは荒野をめざす」(一九七八)においても同様である。裕福な生まれでありながら浮浪者に身を落としている主人公は、二十年前にタイムスリップし、家を出て貧しい女性と暮らそうとしている若い自分を説得しようとする。このときの若い自分の決断が、人生の重大な分岐点だと彼は考えるのである。また彼は、二十年前の若かった自分が、二十七年後の自分の説得に応じなかったことを、深く後悔している。親の決めた人生を否定する若い自分に対して、彼は「人間は変わるもんだぞ。君も頼子も。愛は色あせ情熱も冷え、……やがて苦い目ざめの朝が……行く手は荒野だぞー!!」(『SF異色2』一〇八)と必死に訴えるものの、見向きもされない。彼が頼子の部屋へ押ししかけて彼女を説得しているのを見て、若い自分は激高する(図5)。

「このクソじじい!! こんなところまでしゃばってきやがって!!」
「お、おちつけ!! こ、これもみんなお前の将来のためなんだ!!」
今のおれのようにならなくれば…… なんの生きがいもない日々……



図5 「あのバカは荒野をめざす」藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編2』小学館、2011、p.112

「……」
「生きがいがない!? だったらなぜ死なん!? ぼくはゆるせないぞ。自分がそんなにみにくく老いていくことを!! 過去の自分をせめる以外なすこともなく…… 死ね!!」(『SF異色2』一一二)

彼は若い自分から手痛い一撃を食らい、現在へとタイムスリップする。年を経るということは、例外は数多あろうが、経験を積み人間として成長・成熟することであろう。主人公は、年を経て経験を積んだ人間としての高みから、若い自分を諭そうとするのであるが、彼の態度は若い自分には許容できないものだった。若い自分の目には、主人公は「クソじじい」という忌々しい他者にすぎず、生きるに値しない人間と映る。「死ね!!」という言葉は、将来の自分の抹殺を意味する。主人公は若い自分によって、他者の中でもっとも遠いところまで追いやられてしまう感がある。若い自分にとって主人公が自分であるがゆえの必然と言えようか。結局のところ、主人公は若い情熱に満ちた自分に触れ、「なあにおれだっけまだ……」(『SF異色2』一一四)と感じるようになり、逆に他者としての若い自分に刺激を受けるのである。

「タイムマシンを作ろう」(一九八二)においても、中学生とおぼしい主人公のもとに五一年後の自分がやってきて、過去の自分を変えようとする。主人公の子ども時代からの親友との、醜いタイムマシン

制作争いに巻き込まうとする五一年後の自分は、主人公にとって他者と
言っていない。主人公が現在の親友に「ぼくたち大人になってもタイ
ムマシンだけは発明しないでおうな」(『SF異色2』二六六)と言
う最終場面は、彼が未来にまで至る友情を選択することを示すが、そ
れは未来の自分という他者との決別にほかならない。

「パラレル同窓会」では内的な分裂が無数の自分たちという外的な
形で表されていたが、「自分会議」、「あのバカは荒野めざす」、「タイ
ムマシンを作ろう」においては、内的な分裂が、時間を隔てた自分同
士という外的な分裂に置換えられて表現されている。これらのいずれ
の作品でも将来の自分が醜いのは、過去の自分のためではなく、今
の(すなわち将来の)自分の利益のために、過去の自分に働きかける
という利己主義ゆえであろう。自分の利益のために、他者を利用する
よりも過去の自分を利用するほうが、利己主義の醜さを一層強調する
とすれば、なんとも皮肉なことではないか。その利己主義が、過去・
現在・未来の自分同士の他者性を強化する。ふつう我々は生まれてか
ら現在に至るまで、一貫して「自分」というものがあると信じている
であろう。ところが、これらの作品に登場する自分たち同士の他者性
は、一貫した「自分」というものに対して疑問を呈しているのである。

五 入れ替わった自分同士

このように藤子・F・不二雄の分身ものを見てくると、自分とは必
然ではなく偶然的の積み重ねであるように思われるようになる。本当の
自分などというものはなく、切り捨てられた可能態としての自分が数
多いることに気づかされる。最後に、「自分」という概念の問題に関
して、これまで見てきた作品とはまた異なる観点から描かれている作
品を例に挙げて、藤子・F・不二雄の「自分」という存在に対する強
い関心について、別の角度から確認しておこう。「換身」(一九七二)、

藤子・F・不二雄における「もう一人の自分」

「未来ドロボウ」(一九七七)、「親子とりかえばや」(一九八二)では、
自分と他者の身体が入れ替わるという状況が描かれる。「親子とりか
えばや」は、父親と息子の身体の入れ替わりにより、互いの理解が深
まるという程度のものであるが、「換身」と「未来ドロボウ」は興味
深い問題を提供してくれる。

「換身」では、主人公の若者、年老いた暴力団の組長、主人公の恋
人という三者の身体が、幾度か入れ替わる。ことの発端は、組長がマッ
ド・サイエンティストの開発したエクトプラズムを交換する方法を使っ
て、自分の身体と主人公の若者の身体を取り替えたことである。組長
はこれまでの自分と決別して、新たな身体を得て新たな人生を送りた
いのだ。これは、頭・脳・記憶はこれからの自分のものでして留め、
老いた身体とその身体に付随する人生
のすべて(記憶を除いて)を、他者化
して捨て去ろうとする行為である。当
然、自分の本質は頭・脳・記憶なのだ
という認識が、この行為の基盤となっ
ている。結末は、組長のエクトプラズ
ムがもとの老いた身体に戻り、主人公
と恋人の身体が入れ替わったままとな
るが、主人公の「ここにきみがいてほ
くがいる 心もからだも」(『SF異色
4』一〇七)という言葉で、換身した
ままの二人の結婚が示唆される。楽
観的にハッピーエンディングを迎える
のはいいとしても、自分とは記憶なの
か身体なのか、という問題がここに提
示される。身体の入れ替わりに初めて
気づいたときの主人公の混乱(図6)



図6「換身」『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編4』小
学館、2012、p.82

に類したものは、未解決のまま終わるのではないか。主人公の記憶と身体も、恋人の記憶と身体も揃ってはいるが、精神的な愛はともかく、肉体的な愛はどうなるのか。互いに愛する対象は、記憶の中にある自分の身体なのであるから、互いに夫あるいは妻という他者に、自分を意識せざるをえないのではないか。じつは、ハッピーエンディングと見える状況のその後が怖いのである。

「未来ドロボウ」は、富豪で大脳生理学者である老人が、将来に絶望した少年と契約によって身体を交換する話である。身体との交換が、「換身」におけるようなエクストラバズムという心霊的なものの交換ではなく、記憶の交換という大脳生理学のおおぼしい方法によって行われることは、一層現代社会に通じるところだろう。というのも、記憶の交換における脳と身体との関係は、コンピューターを想起させるからである。脳も含めて、身体のもろすべてが記憶というソフトウェアを入力するハードウェアにすぎないというわけである。野球を知らない老人が野球の試合で活躍するのは、少年の身体と記憶によるものであるという点で興味深い。本来、身体と記憶も脳と記憶の作用のほゞであるが、少年の脳は老人の記憶のみがインプットされているのだから、この場合、脳と記憶と身体とが分断されている。自分とは記憶が身体か、という問題がここにも暗示されている。

ここで想起されるのは、エドガー・アラン・ポーの「ある苦境」(一八三八)である。この短編には身体への入れ替わりとは別の形で、自分とは頭が身体かという問題が提示されている。この短編の女主人公は時計塔の穴から首を出していたため、時計の長針に首を切断されてしまう。そのとき頭部と胴体とが対峙し、本当の自分は頭部なのか胴体なのか、主体はいつたいどちらなのか、と首なしの胴体が考えるのである。これは「未来ドロボウ」で暗示された、自分とは記憶が身体かという問題と共通している。「ある苦境」における頭部と胴体の分裂は、人間の精神と肉体の、形而上的部分と形而下の部分の分裂に

置換可能であるし、さらには理性と野性、理性と本能、意識と無意識などの対立の隠喩へとずらして考えることも可能である。そして、首なしの胴体が考えるという途方もなく滑稽な状況そのものが、不可分のものを分けて対立的に考えることの滑稽さを表していると同時に、滑稽さの中でこそ描きうる形で、分裂する人間存在のありようを伝えていると言えようか。

人間は精神と肉体との合成物であり、言うまでもなく物理的に両者を切断することはできないが、人間を精神的な部分と肉体的な部分に分けて考えることは常套的な方法である。藤子・F・不二雄は「換身」と「未来ドロボウ」において、概念としてではなく、ポーとは異なった形で物理的に精神と肉体を分断してみせた。そして「ある苦境」にも通じるこの二作の滑稽さによって、不安定な人間存在のありようを提示したのである。

おわりに

この小論で扱った作品は一九七二年から八二年の間に描かれており、とくに七〇年代後半に重要な作品が多い。藤子・F・不二雄は、少なくともこの約一〇年間においては一貫して「自分」という存在にきわめて意識的であり続けたのであり、「自分」というものの固有性や一貫性が幻想にすぎないことを、内的な分裂を抱える人間というものがいかに不安定な存在であるかを、さまざまな形で表していたと言える。「自分」へのこのような眼差しが、藤子・F・不二雄のマンガ家人生においてどれほど一貫したものであったかを知るには、もう一人の自分^①以外のテーマの作品から読み取っていくしかあるまい。

藤子・F・不二雄は、彼の人間観を表すために「もう一人の自分」あるいは分身を使っているのであるが、現実のレベルにおいて、実際にもう一人の自分を欲していたのかもしれない。藤子不二雄のペンネー

ムを持つ二人のマンガ家は、それぞれが分身的存在であつたろう。マンガ評論家の米沢嘉博は、二人の個性の違いを「白と黒、SFとホラー、内向と外向……」（米沢 二七四）であるとし、二人を対照的・対立的な分身同士のよう



図7 「昨日の俺は今日の敵」『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編4』小学館、p.384

に表現しながらも、この二人のマンガ家が「二人で一人」であつたことを強調している。また、藤子・F・不二雄と他のマンガ家との合作に触れて、「様々な合作を試みてきたFは、物語を語り続ける手段として、物語を増殖させていくために、もう一人の自分が、分身が欲しかったはずなのだ」（米沢 二六〇）と述べている。とすれば、「昨日の俺は今日の敵」では自分同士の叱咤という自虐的な形で（図7）、「ふたりぼっち」では自分同士の深い共感と楽しい共同作業という理想的な形で（図8）、マンガ制作において（もう一人の自分）を切望する気持ちが現



図8 「ふたりぼっち」『藤子・F・不二雄大全集 少年SF短編1』小学館、2010、p.203

藤子・F・不二雄における（もう一人の自分）

れたと考えてもいいのではないだろうか。

注

(1) 本論で扱う（もう一人の自分）を描いた作品以外にも、タイムトンネルで一〇〇年を超えて出会う分身たちを主人公にした『みきおとミキオ』（一九七四・七五）、クロインの分身が登場する「俺と俺」（一九七六）、遺伝子情報によりまったく同じに作られた分身的ロボットと決闘する（殺しあう）「ひとりぼっちの宇宙戦争」（一九七五）、そして『ドラえもん』においては、自分の分身を作る話である「分身ハンマー」（一九八〇）、自分の影を使役するのを描いた「かげがり」（一九七二）と「影ぼうしフラッシュ」（一九八五）のような作品も、藤子・F・不二雄は描いている。

(2) 作品からの引用は『藤子・F・不二雄大全集』（小学館）を使用し、括弧内に巻の書名（『SF異色』『少年SF』と略す）と頁数を示す。

(3) 『ドラえもん』の「かげがり」では、のび太の影がのび太本人に取って代わろうとする。これも自我と影の関係に重ねて考えることができる。のび太が影のように黒くなっていき、その反対に影の黒さが薄くなっていく様子には、なかなか恐ろしいものがある。なお、人格の中の対立は、さまざまな作品に表れている。少しマンガの例を挙げてみると、永井豪「霧の扉」（一九七三）の第三の扉「鎌」においては、夢の中の自分が現実の自分を殺す。夢の中の自分とは無意識の中のもう一人の自分でもある。諸星大二郎「影の街」（一九八五）においては、主人公の少年のエス（イド。本能的衝動）が暴走し、少年までも食らおうとする。これについては「遍在する無意識——諸星大二郎の『袋の中』と『影の街』」、『東海学園 言語・文学・文化』第二二号（二〇一三）、二九—三九頁において述べた。

藤子・F・不二雄における「もう一人の自分」

双子ものも分身ものの範疇に入ることが多いと言えよう。たとえば篠原千絵『海の闇、月の影』においては、クライマックスで双子の姉妹が殺しあうような状況に至る。これもまた自我と影の戦いの隠喩と捉えることができる。ついにながら、クローンの問題が映画

『アイランド』(二〇〇五)で扱われている。オリジナルとクローンとが対決することになり、両者の他者性がそこに現れている。

(4)そこに、同じ一人称の語りでも小説とは異なる表現形式が生まれることになる。たとえば萩尾望都『半神』(一九八四)においても、一人称の語りと客観化された絵とが生み出す一種のズレが効果的だった。

(5)もう一人の自分に会った者は命を落とす、という言い伝えはよく耳にするが、「自分会議」では未来の自分と出会うことで過去の子ども時代の自分が死に、そのため未来の自分も存在しなくなるという展開で、この言い伝えをきわめて皮肉な形にひねったものとなっている。なお、パラレルワールドの導入はこの言い伝えを回避する格好の手段でもあるだろう。藤子・F・不二雄はパラレルワールドを利用して、分身との出会いを平然と描いてみせた。

(6)若い自分が老いた自分と決別するパターンは、手塚治虫『火の鳥 異形編』(一九八二)にも見られる。この作品では、火の鳥から与えられた罰として、老境に入った八百比丘尼が三〇年ごとに三〇年前の若い自分に殺される。これは老いた自分を他者化して抹殺するという捉え方もできよう。

(7)「ノスタル爺」(一九七四)でも主人公が過去にタイムスリップするが、戦争が原因で過去を失った主人公は、過去の自分を変えることで今の自分の境遇を良くしようとする利己主義からではなく、「一度失ったものを二度も失いたくありません」(『SF異色1』三四二)という理由で、すすんで土蔵に閉じ込められ、過去の自分と幼馴染で妻となる女性とを、死ぬまで見つめ続けるのである。主人

公の苛酷な運命は、『火の鳥 異形編』の八百比丘尼の運命が繰り返されるのと同様に、一定の年月(すなわちタイムスリップ後からタイムスリップの瞬間までの期間)ごとに、繰り返されることになるはずである。

(8)若い身体への願望を扱った作品は数多あるが、マンガにおいては模図かずお『洗礼』(一九七四―七六)はその願望を扱った好例であろう。これは母親が身体を入れ替えるために娘を大切に育てるところのある、母娘の関係を描いたものと考えられることもできよう。

(9)『ドラえもん』の「男女入れかえ物語」(一九八五)では、のび太とずかしの身体が入れ替わり、のび太の身体となったずかが野球で大活躍するが、「未来ドロボウ」の場合とは異なり、それはのび太の身体の記憶によるものではなく、ずかしの運動神経の良さによるものである。したがって、のび太の運動音痴は身体ではなく脳の働きの鈍さゆえということになり、のび太のダメ男ぶりが強調される。

(10)しかし、性的な要素が加わると、この頭か身体かという問題は複雑さを増す。トーマス・マンがインドの伝説を下敷きに書いた作品である『すげかえられた首』(一九四〇)では、知性に秀でた若者と遅い肉体の若者(美しい女の夫とその友人)の首がすげかえられる。一人の人間としては頭に従うとされるものの、女の夫となるのは頭の持ち主なのか、身体の持ち主なのか、さらには、性行為は肉体の行為であるがゆえに女のお腹の子の父親は身体を持ち主ではないのか、という議論がなされるのである。なお、頭(顔)と身体とが互いに影響しあっていくところには、頭と身体という二項対立から両者の融合へ向かおうとするバランス感覚が働いていて興味深い。

引用文献

- 河合隼雄『コンプレックス』岩波新書、一九七一年
桑原知子『もう一人の私』創元社、一九九四年
永井均『マンガは哲学する』講談社、二〇〇〇年
藤子・F・不二雄『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編1』小学館、二〇一一年
——『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編2』小学館、二〇一一年
——『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編3』小学館、二〇一二年
——『藤子・F・不二雄大全集 SF・異色短編4』小学館、二〇一二年
——『藤子・F・不二雄大全集 少年SF短編1』小学館、二〇一〇年
米沢嘉博『藤子不二雄論——FとAの方程式』河出書房新社、二〇〇二年
驚田清一『じぶん・この不思議な存在』講談社現代新書、一九九六年
Herdman, John. *The Double in Nineteenth-Century Fiction*. Macmillan, 1990.